～楽譜～私の異世界探検ライフ

黒椿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
～楽譜～私の異世界探検ライフ

【Ｎコード】
Ｎ５４０７Ｘ

【作者名】
黒椿

【あらすじ】
大雑把な主人公と、やる気のない精霊とが繰り広げるほのぼの（！？）ファンタジー。　魔法につられた主人公が精霊界を救うべく、精霊と《楽譜》を集めてまわります。　そのなかで起こる様々な出来事を突破し、主人公を待ち受けているものは…。

登場人物紹介

麗舞（れいぶ）　桜花（おうか）
性格　大雑把
性別　女
所見　小さい頃に母親を亡くし　一人暮らし。
中学二年生　成績は何だかんだ言って中の上
死ぬほどを食事を愛している。（食事を邪魔されるとキレます）
現実的で、常に損得勘定が働く。そのわりに意外と魔法とかを夢みていたりする。

ソフィア・アイメーレジー
性別　女
性格　天然なのか、それとも考え深いのか分からない。
所見　目上の人には猫をかぶり絶対的に危険なことがない限り自分から動かない。
穏やかにも見えるが、案外強行突破したりする変わり者。

マリア・レイストクレアティ（レイクトクレアティ国の女王様）
性別　女
所見　時たま出てくる精霊界でもっとも偉い方。
優しいけど変わったものが好きで真面目。

第1話

……ここ、どこなんだろう

私は、全く見覚えの無い場所に座っていた

え～と、何がどうなってこうなったのか、思いかえしてみよう

たしか、学校から帰ってて、友達がなんか急に怒りだした原因を考えてて、出てこないから両手を組んで、うなってたんだ！！

そうだそうだ！で、なんか足元に地面の感覚なくなったなと思った瞬間落ちたんだ！

で、目を開いたらここにいたと、だからか、なんかお尻痛いなと思ったら落ちた時に尻餅ついたんだな…

だれだよ！あんなところに落とし穴掘ったのは！！

おかげでこっちは尻餅ついたんだぞ！！！！

まぁ、居もしない相手に怒ってもしかたないか…

にしても、見渡す限り森、森、森だな～

つっても私の周りは草原だけど、そう、私の周りだ・け！

私がいるところだけ草ぼーぼー

だれだよ、掃除さぼったの！

それともなに？新手の嫌がらせ？

「この森、燃やしてしまおうかしら…」

私はいい加減切れて、ものすごく物騒な事を言い出した

すると、突如上から声がした

第2話

すると、突如上から声がした

『あ、すいません急に上から私は精霊のソフィアと申します。ってこんな事言ってる場合じゃない森を燃やすなんて止めてくださいよおぉぉ！』

は？、こいつ何言ってんの？私は思ったが口には出さなかった。

「あぁ、あの事、あんた何言ってんの？あんなの嘘に決まってんじゃん」

こいつ本物のバカか天然かどっちなんだ

『なんて物騒な嘘を・・・もうそんな事言わないでくださいよ』

こいつ、ウザい。さすがに口には出さないが、いや出しそうになったがな

「はいはい、もう言いませんよぉ～」

適当に答えといた。

『はいは一回です！！』

マジウザい、こいつ母親かなんかか？もちろん、口には出さない。

出しそうになったけど……ぐっジョブ！私、忍耐の子！！

「はい、わかりました！！これでいいでしょ？」

「う～ん、まぁ良いですよ」

「そういやあんた誰？何者？」

『私はあなたの世界の言葉で言うといわば精霊・妖精の類いです私の名前はソフィア・アイメーレジーです。ソフィアとお呼びください』

「私は麗舞　桜花、桜花でいいよ」

『よろしくお願いします。桜花さん』

「急だけど、ソフィアは髪と瞳は赤だけど、全体的に緑だから木の妖精とかだったりするの？」

『あ、いえ、私は炎の属ですんで炎の妖精です。』

私は内心
（炎属性な癖に燃やすなとか言うのか…）
と思いつつも

「え！？炎！？服とか靴緑なのに！？」

と、驚いてみたりした。

『はい、私赤より緑の方が好きなんで緑にしてるだけなんですよ。髪と瞳は親族に全体に変えるなと言われているので、どうする事もできません…』

ソフィアは肩をすくめてそう言った

「全部を属性に合わせなくていいの？」

『はい、水の妖精が赤い服着たり、髪にしたり瞳にしたり、雷の妖精が黄色い服着たり髪にしたり瞳にしたり、みんな思い思い好きなようにしてますよ。』

「思っていたより妖精って軽！！」

私達（おもに私が）はそこで自分達の事について話していた。するとソフィアが急に思い出したかのように私に向かって喋り出した

『突然ですが、桜花さんにお願いがあるのですが、良かったら聞いてくださいませんか！？』

「いいよ」

私は気軽にそう発言した事を後々後悔したり喜んだりすることになるのでした。

第3話

「で、何？その頼みって」

『じつは、私達の世界には伝説の楽譜という物が在るんです。しかし、その楽譜は3つの世界に散らばってるんです。今私達の世界は地盤が崩れ、壊れかけています。しかも悪魔もそれをいい事にこの世界を乗っ取ろうとしているのです。それを直す事が出来るのが、伝説の楽譜なんです。伝説の楽譜があればこの世界は治るし悪魔もきっと諦めてくれるはずです。だから伝説の楽譜探し手伝ってください！』

自分からいいって言っといて悪いが面倒くさそうな為、断らせていただこう。

「ごめんなさい、自分から言っといてなんですが、面倒くさそうなので、断らせていただきます。それにさ、仮に私がそれを手伝ったとして、私に何の利益があるの？」

『そんなっお願いです！手伝ってください！！』

「はぁ、じゃあ、仮に私が手伝ったとして、私になんの利益があるの？それに、私じゃなくても他の人でいいじゃない。」

『それは、普通、この世界に人間は入れないようになっています。しかし、あなたは入ってきた。それは、あなたにはなにか特別な力があるという事なのです。それに、この世界にある言い伝えがあるのです。』

（入ってきたっていうより落ちたの方が正しいけどね。）

「言い伝え？」

『はい、それは、
この世界が壊れかけた時、救いの女神がこの地を救いに異世界から
舞い降りるだろう。
という言い伝えがあるのです。』

「救いの、女神…」

『きっとあなたがそうなのです。現に、何千年も前に救いの女神が
現れ、世界を救ってくれました。まぁ、あなたの世界と私達の世界
じゃ時間の流れが大きく違うのですがね。』

「私にも出来るのかな？」

『きっと、あなたにならば出来ます。いいえまあなたにしか出来な
いのです。
それに、魔法使いになれますよ？』

魔法使い・・・

「えっ、本当！？じゃなくて、ゴホンッ
ま、まぁ？そんなに私が必要なら手伝ってあげなくもないけど？」

私は内心、魔法使いという言葉に心の奥底からウキウキしていた。

『ありがとうございます！！恩にきます！このご恩、一生忘れません！！！』

「そんな大げさな…」

私はそんな大げさな…と言ったがそれがどれだけこの世界にとってありがたいことなのか知るよしもなかった。

ｌＳＩＤＥソフィアー

私はいまさっき女王様から呼び出された。

女王様もこのいそがしい時にどうしたんだろう。

この世界は最近、壊れかけている。

この世界の地盤にヒビが入り、それだけでも大変だというのに、そのヒビから悪魔がこの世界に入りこんできた。

この世界は大きく分けて２つ、１つは、私達が住んでいる精霊界、もう１つは悪魔達が住んでいる悪魔界、決して交わる事の無い世界が交ってしまった。

しかも、悪魔が所々で問題を起こしているのだ。

しかし、いくら大変だとはいえ、侍女の私が呼び出されるとは、この世界も末期だな。

とか思いながら歩いていると王の間についた。私はコンコンコンッと軽く扉を３回ノックしたあと、

『ソフィアです。』

と言う。すると中から

『どーぞー』

と優しい感じな声がした。

扉をあける

この部屋の一番奥にある玉座に座っているその人がこの国、レイストクレアティ国の頂点に立つ御方だ。

『おまたせいたしました。マリア様私になにようで御座いますか？』

『この国が壊れかけていることは知っていますね。』

『はい。』

『ついに現れたのです。』

『現れた、とは？』

『救いの女神が、この国の救世主がです！！！』

女王様が目を輝かせて言う。

『それは、本当でございますか！？』

『はい、今さっき森に現れたようです』

『しかし、何故それを私に？』

『あなたに行って貰いたいのです。楽譜集めに。あなたにはそれなりの力があるし、きっとやり遂げてくれると信じています。』

『…私で、宜しいのですか？』

『あなたにしか出来ないのです。
お願いできますか？』

『はい！』

『あ、それと、その子に会ったら、私の所に連れてきてくださいね
会ってみたいんで。』

『かしこまりました、行って参ります！！』

『怪我のないようにね。』

私は礼をし、その部屋から出て行った。

『とりあえず、当分の間猫かぶるか…』

私は小さい声でそう呟いた。

とりあえず、森に行くかな。
救いの女神様に会いに。
『よし、転送』

――――

森に着いた瞬間、声が聞こえた。

「この森、燃やしてしまおうかしら…」

『あ、すいません急に上から、私は精霊のソフィアと申します。ってこんな事言ってる場合じゃない森を燃やすなんて止めてくださいよぉぉぉ！！』

これが私達の出会い方。

第4話

『それじゃ、行きますか。』

「え、どこ」

私が言いかけたその瞬間、私は宙にうき、周りの景色は変わっていた。

どさっっ

「痛った～、ってここどこ！？」

気が付けばそこは森ではなく、とても豪華な場所だった。
目の前にはまばゆいばかりの光を放つ金色の髪を上の方で緩く結い上げ、サファイアのような綺麗な色の瞳に、青色と銀色を使った服を着た女の人がいた。

『ここは王室でございます。こちらに居られる方は、この国の頂点に立つおかた、女王陛下様であられます。』

「えっ、女王様！？は、初めまして！地球の日本という所から来た、麗舞　桜花と言います。宜しくお願いします！！」

『あなたが桜花ですね！？会うのを心から楽しみにしてました！！私の名前はマリア・レイストクレアティです！マリアって呼んでください！』

（女王様明るっ、でも超美人、めっちゃ綺麗～）

「あ、えと、宜しくお願いします！マリア様！！」

マリア様はキャーキャーとはしゃいでいるのでスルーしていいよね？

「そうだ、ソフィア今さっきのなんなの？」

『あぁ、あれは瞬間移動ですよ。』

「ふ～ん……って、瞬間移動！？今瞬間移動って言ったよね、マジ！？」

あまりにもさらっと言うもんだからそのままスルーする所だった…

『はい、本当でございますよ。お疑いになるのならご自分の頬をつねってごらんなさい。』

ぎゅっ

「痛い！本当なんだ！夢じゃないんだ！すっごーい！！」

私はとにかくはしゃいだ。魔法は昔から私の憧れなのだ。

「私にも出来る！？」

『はい、出来ますよ。瞬間移動は修業がいるので出来ませんが、他の魔法なら契約をしたらできますよ。』

「そんだけ！？じゃあやろ！今すぐやろ！！」

『それでは、こちらの紙にご自分のお名前をお書きください』

かきかき

『書きましたね？では、女王様！』

何が起こるのだろう

…少し不安だなー

『では、私の力を少しですが、あなたに分け与えましょう。』

目の前に黄色い光を放つ球体型の物が現れた。

『さぁ、受け取りなさい』

私がそっと触れるとそれは黄色の光を放った。あまりにもすごい光のため、私は目をつぶってしまった。

そっと目を開けるとその球体は消えていた。

「あれ？あの球体型は？それよりなんか、体にすごい力が宿った気がする！」

あくまでも？感じ〟だが。

『これであなたも魔法が使えますよ』

「えっ本当！？これで念願の魔法使いだ～！！！子供の頃からの夢だったんだよねー！！」

「ねぇ、マリア様、そういえば魔力？を渡すの少しって言ってたけどなんで？」

『私はこの国の唯一の支え、全ての力をかす訳にはいかないのですよ、ごめんなさいね。』

「ま、そうだよね、普通、少しでも力を分けてもらった事を感謝しなくっちゃ」

『分かって頂けましたか？にしても、とても嬉しそうですね、では！これから私と一緒に楽譜集めがんばりましょう！』

「まぁ、力も貰っちゃったし、頑張るしかないか、これからよろしくね！ソフィア…あぁぁ！？」

瞬間、私の体は宙に消え瞬く間に景色は別の物と化していた。

『一刻の猶予も惜しいのです！さぁ、こちらへ！！』

私、本当に頑張れるだろうか……

二人の旅はまだ始まったばかり、これからまだまだ続きます。

頑張れ！桜花、ソフィア！

第5話

そこは見渡す限りの海だった。

いや、光が屈折して見えるから　恐らく海の中だ息が出来るということは

自分が魔法を使えている証拠だろうか…

まぁ、魔法使えてなかったら私、今頃溺れてるんだろうけどね…

私、泳げないから…

私の頭にふと疑問がよぎった。

「そうだ、ねぇ、伝説の楽譜ってのは何処にあるの？」

『そうですね、多分、竜宮城ですかね』

「そっか～竜宮城か～…って竜宮城！？マジで！？あるの！？竜宮城！！」

『はい、ありますよ。』

「でもさ、もし帰る時に玉手箱渡されてお婆ちゃんになったらどうしよう！！」

私の中では竜宮城＝玉手箱＝じいさん（ばあさん）になっている。

『いや、私達が貰うのは楽譜ですし、それに、玉手箱貰ったら開けなければいいだけじゃないですか』

「そっか、そういやそうだよな、じゃあ、いっか早く楽譜探しに行こう」

『マイペースですね…まぁいいです、そうですね、それじゃめざすは竜宮城です！！』

こうして私達の旅は始まった

第6話

ほのかに感じる冷たい水に包まれながら、どこまでも続く広い海のなかを泳いでいた…
いや、新幹線のように猛スピードで進んでいた。
にも関わらず竜宮城にはなかなか着かない。
まぁ、私が寄り道してるからなんだけどね…

『桜花さん、いい加減ちゃんと進んでくださいよ～』

「え～、いいじゃん、私泳げないからこんな水の中に入ることないんだから。」

深海には見たこともない魚がいっぱいいた。
色とりどりの魚がそこらじゅうにいっぱい！

『え！？桜花さんって泳げないんですか！？』

「そうだよっなんか悪い！？みんなに言われるよ！！」
『いえ、悪くは無いんですが、桜花さんって運動神経良さそうなイメージがあったんで』

「あ、でも水泳以外のスポーツとかは全部クラスで1番だよ」

『やっぱりあなたってすごいですね…』

「そうかな？」

『すごいですよ！水泳以外ねスポーツ全て1番とか！！』

「そういうソフィアはどうなの？運動」

『……あっ、あの魚綺麗ですよ』

「ごまかしたっ」

『いいじゃないですか～、別に…』

「まぁ、人（妖精？）にも得意不得意があるもんね！」

『そうです！皆それぞれ得意不得意があるんです！！』

「水泳が出来なくて何が悪い！！」

『運動がいまいち出来なくて何が悪い！！』

「そうだそうだ！！」

「『……あははっ』」

私達は2人で少し笑いあった。

「それにしても、ここって、楽しい～！！」

『はぁ、しょうがないですね、少しだけですよ』

「はぁ～い」

そして私はそこで魚を眺めていた。

『もぉー！、いい加減にしてください！！！』

「うわ！！なに！？急に、びっくりしたー」

『いつまで待たせる気ですか！いい加減行きますよ！！』

「え！？もうそんなにたった？」

『はい、もうかれこれ数時間も』

「ごめんごめん、それじゃ行こうか」

『やっと出発ですか…』

「あはは…」

そして私達は水の中を進んでいった。

そして、微かにぼやける視界に眩しい光を放つ物が見えた。近づくにつれはっきり見えるその存在。

竜宮城がその姿を現した。

「竜宮城ってあれ！？」

『はい！あれです、気を引き締めてくださいよこの先、なにがある

かわかりませから』

「分かった、その楽譜を守る人？を倒して楽譜をゲットするんでしょ？」

確かそんな感じに説明された気がする。

『確かにその通りですけど、倒すと同時に相手の心を救なわなければいけません』

「相手の、心？心をどうやって救うの？」

『戦う前に相手の心を自分が救うんだという事を証明するセリフを言わなければなりませんその言葉はご自分でお考えください。』

「相手の心を自分が救うんだという事を証明する言葉、分かった考えとく」『お願いしますよでないと相手は死ぬ事になりますよ』

「相手の命までかかってるのか、ならとことん頑張らなくちゃな、さすがに命はな」

相手が死ぬところなんて
喜んでみるほど私は鬼畜じゃない　まっぴら御免だ。面倒だが致し方ない

『本当にお願いしますよ』

「も～、分かったって」

『本当に分かったんですか…？』

「大丈夫だって」

（私ってそんなに信用ないかなー）

『はぁ、とにかく、本っ当に頑張ってくださいよ。
さぁ、そろそろ竜宮城に入りますよ』

こうして私達は竜宮城に踏み込んだ。

いや、踏み込もうとしたが扉が重すぎて開かなかった。

「も～、どうやって入るんだよ」

『なにやってるんですか？桜花さん、せっかく私が開けようとしてるのに』

「は？どうやって？」

『無論。』

《ガキャゴキャダーン！！！》

『強硬突破ですが』

「ソフィアって運動苦手なんじゃ…」

『破壊系魔法の類いは大の得意ですよ。まぁ、今さっきのは肉体強化の方が正しいかもしれませんがね。』

『ちなみに、破壊系魔法はクラスで1番です。』

ウフフッ、そう微笑みながらソフィアはそう言いはなった。

「お見それ致しました。」

魔法ばんざい、私は心からそう思った。

そうしてやっとのこったで竜宮城の中に入れた。

プラスソフィアの以外な一面発見。

第7話

「にしても、何！？この無駄な広さに無駄なきらびやかさ！！」

『まぁまぁ、落ち着いてください』

「この建物の中に一軒家がいくつ入るの！？竜宮城だからか周りにやたらと魚の肖像画とかあるし、こんなのに金使う位ならもっとましな事に使え～！！」

『本っっ当に落ち着いてください、周りの視線が痛いです。』

はっとして周りを見渡した、周りの人（魚？）が痛い人を見るような目で見ていた

『でも、仕方ないじゃないですかここには乙姫様が住んでいて、それに、乙姫様の召使いも住んでいて、さらに一般の方もいるんですから、ちなみにこの屋敷の面積は１００００００…』

「言うなぁぁぁぁぁぁ！！気が遠くなる！！燃やしてやろうか！」

『いや、無理ですよ。だってここは海の中ですし…』

「んだがぁぁぁぁ！」

「もういい！！それより早く楽譜見つけに行こう！」

『そうですね、そうしましょうか、とりあえず、奥に進んでみます

か？』

『そうだね、そうしようか、よし、レッツゴー！』

私達はとにかくそのばかかでかい屋敷を走りまわった。

バァン！

「ここかぁ～～！！」

ヒューウ

そこはただの物置部屋だった

「物置部屋かよ！」

『みたいですね』

「よし、次！次行こ！！」

～数十分後～

「はぁはぁ見つからねぇよ！」

『おかしいですね、もうそろそろ見つかるはずなんですけど…』

「とりあえず、もう少し頑張ってください」

「う゛～」

『でも、桜花さんが歩かずに走って探すって言ったんですしよ？自業自得です！』

「う〝ぅ〜」

正論を言われ私は全く反論が出来なかった。

私はぶつぶつと文句を言いながら歩いた。

ドーン！

歩いていると、目の前にほかの部屋とは比べ物にはならないくらい豪華で大きい扉があった

「もしかして、ここ？なんかでかいしきれいだし…」

『多分、ここなんでしょうね…』

「もし物置部屋とかだったら私、マジでキレるよ？」

『大丈夫です。もしそうだったら私もキレます。』

ギィー

私達はそのずっしりと重たい扉を開けた。

その先には狂ったように笑う綺麗な人（人魚？）がいた

「こんにちは〜？」

《あら、あなた達誰？見たことの無い顔だけど》

目の前には青い髪に青い瞳を持っていて、青と水色のフリルとレースをふんだんに使ったドレスを着た綺麗な人（人魚？）がいた。

「もしかして、あなたが乙姫様ですか？」

第8話（前書き）

とても短いです。

第8話

《えぇ、そうだけど、何か御用かしら？》

『やっぱりこの人が番人です。覚悟は出来てますか？』

「うん、大丈夫」

《あなた達何をヒソヒソ話していらっしゃるの？それに、あなた方は誰なの？》

「あぁ、すいません、私は人間界から精霊界を救うべく楽譜を求めてここに来ました。貴方が持っている楽譜を私達にください。最終的には強行手段をとらせて貰うかも知れません。」

《あなた達、この楽譜の事を知っていらっしゃるの？》

「はい、お願いします楽譜を私達にください。」

《ふーん、この楽譜をねぇ、…やぁよこの楽譜は私に力をくれるのそんな便利な物はい、どうぞって素直に渡す訳ないじゃない。》

「はぁ、残念です。では、こちらも強行手段をとらせていただきます。」

大きく息を吸って私は叫んだ

「哀れな彼女に魂の救済を！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5407x/

～楽譜～私の異世界探検ライフ

2011年11月9日23時12分発行